

第7章

本事業に対する評価



1 管理官評価

第42回

「東南アジア青年の船」事業

管理官 上村 秀紀



(1) はじめに

平成27年12月15日、今回の「東南アジア青年の船」事業の参加者が、無事に東京に戻ってきました。管理部は事業を安全に実施し、参加者全員が健康に事業を全うするよう全力を尽くしました。

今回は、ラオスにおける代表団の初めてのホームステイ、20年ぶりのマレーシアのコタキナバルへの寄港も行いました。そして、日本政府関係者の支援とASEAN各国の政府関係者の積極的な参加と協力により、参加青年たちは所期の目標を達成し、成果を確実に手にしたと信じています。

以下、私が直接見聞きしたことも織り交ぜながら、今回の事業を振り返りたいと思います。

(2) 日本国内プログラム

10月28日、参加青年が一堂に会し、参集式及び歓迎レセプションが開催されました。翌29日は午前中に各国ナショナル・リーダー、ユース・リーダー及びアシスタント・ユース・リーダーが眞子内親王殿下に御引見いただき、その後、参加者全員は11月1日まで、ソリダリティ・グループごとに地方プログラムを実施しました。11の地方（山形県、福島県、茨城県、新潟県、愛知県、島根県、愛媛県、佐賀県、長崎県、熊本県及び北九州市）に分かれて、それぞれの地で、地元青年との交流、ホームステイなどを行いました。それらを通じて、ASEAN各国の青年にとっては、日本を知る良い機会になりました。また、この機会に日本参加青年は、主催国の青年として、ASEAN各国からの青年をもてなす貴重な経験を積みました。

11月2日及び3日の2日間、参加青年は「日本・ASEANユースリーダーズサミット」に参加しました。本サミットでは、「青年の社会活動への参加 - だれもが共生できる社会を創るために、青年にできることは何ですか」（Youth Participation in Social Activities - As a youth, what can you do to create an inclusive society?）をテーマにディスカッションを行ったほか、駐日ASEAN各国大使館等の御協力の下、各国のパフォーマンス、展示などの文化交流が行われました。この段階で既に参加青年の間に国を超えた友情の輪が広がっていることに目を見張りました。さらに、本サミットでは、別

途募集した日本人青年約100人との交流も活発に行われました。

11月4日には、乗船後のディスカッション活動に関する理解を深めるため、所属するディスカッション・グループごとに、テーマに則した課題別視察を実施しました。また、同日、参加者を代表して、各国ナショナル・リーダー、ユース・リーダー及びアシスタント・ユース・リーダーが、安倍内閣総理大臣への表敬の機会を頂き、温かい励ましのお言葉を頂きました。

(3) 船内活動

ディスカッション活動及び事後活動セッション

参加青年は、「青年の社会活動への参加」という共通テーマの下、八つのテーマについて、各国の状況の理解を深め、共通の課題について意見交換を行い、その結果を発表しました。その後、ディスカッションの成果を事業終了後にいかに効果的に社会に還元できるかを考え、問題解決のための行動の計画と実践に必要な具体的なスキルを身に付ける学習を行いました。ここまでの活動は、参加各国から公募した8名のファシリテーターが、参加青年を指導・支援しました。

ファシリテーターは、最終寄港地であるマレーシアで下船しましたが、ここまでのディスカッション活動の成果は、参加各国の事後活動組織から派遣された代表者に引き継がれました。その後の事後活動セッションにおいて、参加青年は、国ごとに分かれて、事後活動組織代表者とナショナル・リーダーからのアドバイスを受けながら、具体的な活動計画を策定し、それを帰国報告会で発表しました。

ソリダリティ・グループ活動

各国参加青年で混成されるソリダリティ・グループ（SG）は、いくつかの船内活動の実施単位となったほか、寄港地活動についても、視察などがこのグループ単位で行われました。

また、グループメンバーの相互理解と交流を促進するために、参加青年たちの発案により、工夫をこらしたゲーム、SG王国造りなどのレクリエーション活動が行われました。これらの活動によりグループ内の結束が深まり、船内及び訪問国活動を一層効果的に行うことができました。

クラブ活動

クラブ活動は、共通の趣味と関心の追求を通じて、参加青年相互の自発的交流を図るものです。今回、各国から、それぞれの文化にちなんだ多彩な企画が提示されま

した。そして、参加青年は積極的に他国文化の吸収に努めるとともに、自国の文化を教えるという経験を通じてリーダシップスキルを身に付ける経験を積みました。参加青年は各クラブにおいて自身が習得した舞踊や武術、文化的背景についてクラブ発表会でその成果を披露しました。

ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、国ごとに、歴史、文化、国民性、現在の青年を取り巻く環境など様々な角度から自国を紹介するものです。

それぞれの発表は相当時間をかけて準備してきたことがうかがえ、見応えのあるものでした。私自身多くのものを学びましたが、参加青年は、他国の文化等を学ぶ良い機会であったのみならず、発表に至る準備や練習を通じて、自国文化の多様性について学ぶ良い機会になったのではないかと思います。

自主活動

前年度から、船内活動として、青年たちが国や既存のグループにとらわれずに活動できる「自主活動」の時間が、公式プログラムとして設けられました。青年たちは、ナショナル・プレゼンテーションでは紹介しきれなかった自国文化の紹介、共通の趣味を通じた活動など、各国青年が参加できる多様な企画を提案し、様々な交流を行うことができました。また、ミャンマーの歓迎夕食会においては、自主活動のミュージック・クラブが自作の歌の演奏を披露し、喝采を浴びました。

(4) 訪問国活動

11月5日に、大勢の方の見送りを受けて東京港を出航し、フィリピン、ベトナム、ミャンマー、マレーシアに寄港するとともに、航空機により代表団がラオスを訪問しました。

これらの訪問国では、3日から5日間にわたり滞在し、表敬訪問、課題別視察、地元青年との交流のほか、1泊または2泊のホームステイを実施しました。

ホームステイでは、参加青年は、宗教や民族による価値観の違いに戸惑いながらも、各国の家庭と深い人間関係を築くことができました。出港の際は毎回、ホストファミリーとの涙の別れになりました。

今回訪問できなかったブルネイ、カンボジア、インドネシア、シンガポール及びタイについては、船内で行われたナショナル・プレゼンテーション、参加青年同士の日々の交流などを通じて、これらの国に関する理解を深めることができました。

フィリピン

フィリピンにおいては、第1寄港地であることから、

日本に引き続きディスカッション・テーマに則した課題別視察を行い、テーマの理解を更に深めるとともに、地元青年との交流を行いました。また、ナショナル・リーダーは、リサール公園において厳肅な雰囲気の中、献花式を行いました。出港式が突然の大雨により、急遽、船内で行われるなどのハプニングはありましたが、出港時は晴天になり、ヘリコプターからのフラワーシャワーの中、華やかに出港することができました。

ベトナム

ベトナムは、寄港中にラオスへの代表団派遣があることから、5日間のプログラムとなりました。ナショナル・リーダーはホーチミン市リーダーへの表敬を行いました。課題別視察では、政府機関、民間企業、大学などの施設を訪れ、様々な知識を得るとともに、地元青年との交流も行われました。また、博物館見学、クチ・トンネル視察など、ベトナムの文化や歴史に触れる貴重な経験を得ることができました。

ラオス

ラオスへは、ラオス・ナショナル・リーダー及び全ユース・リーダーが航空機により訪問しました。今回は通常の1泊2日ではなく、2泊3日の行程にしたことから、初めてホームステイを実施することができました。

また、代表団は副首相を表敬訪問したほか、ラオスの文化に触れる貴重な体験を積むことができました。

ミャンマー

ミャンマーは、前年度に引き続き2年連続の寄港となりました。当国においては、八つのグループに分かれて大学を訪問し、地元大学生による学校案内やディスカッションなどの交流を行い、当国の大学制度などを知る良い機会となりました。また、前年度は、初めて1泊2日のホームステイを経験し、本年は2泊3日を予定していましたが、ヤンゴン川の潮の都合で滞在時間が短縮されてしまい、残念ながら今回も1泊2日となってしまいました。しかしながら、参加青年は満足のいく経験を積むことができました。

マレーシア

マレーシアにおいては、首都のクアラルンプールではなく、1995年以来、20年ぶりのコタキナバルへの寄港となりました。大学、企業などを訪問し、地元青年とのディスカッションのほか、地元料理作り体験などサバ州の文化に触れる良い機会を得ることができました。コタキナバルには久しぶりの寄港でしたが、中央政府、地方政府及び事後活動組織が一体となって尽力して下さり、訪問国活動を成功裏に終えることができました。

(5) 船上既参加青年の集い

寄港国では、参加青年がホームステイを行っている間に船上同窓会を行い、多くの既参加青年が懐かしい船に乗り旧交を温めました。寄港国の既参加青年だけでなく、多くの他国の既参加青年も国境を越えて参加していました。既参加青年の中には、SSEAYP初期に参加した人たちも含まれており、既参加青年によるASEAN各国の国境を越えたネットワークの強さを感じました。また、マレーシアのコタキナバルにおいては、久しぶりの寄港であったことから盛況な会となりました。

(6) 全体のまとめ

以上、各種活動の概要を中心に述べてきましたが、以下、プログラムの全体を通じたまとめを、私自身の感想も交えながらお伝えします。

まず、この「東南アジア青年の船」事業が、ASEAN各国においていかに高く評価されているか、また愛されているかを肌で感じることができました。

いずれの訪問国でも大歓迎を受けました。要人の方々には、式典への出席や表敬の機会を頂きました。また、現地のマスコミにもたくさん取り上げられました。

受入委員会の方々にはいずれの国でも大変良くしていただきました。各地の船上同窓会やオープンシップにもたくさんの方が来てくださいました。それらの中には、多くの既参加青年が参加しており、前年に参加したばかりの人から何十年も前に参加した人まで、世代を超えてたくさんの人たちが結集してくれました。大変有難いことです。

日本政府に対する感謝の言葉も何人もの方から頂きました。私はそれらの人たちに対し、日本政府の力だけでなく、ASEAN各国の支援と協力があってこそ、40年以上もの長きに渡ってこの事業が続けられているということを申し上げました。

まさに、この事業は、日本とASEAN各国との友好の象徴です。また、この地域が紛争地帯であれば、船の運航はできませんので、この地域が平和であることの象徴でもあります。このため、この事業がこれまで42年間続いてきたように、今後も長く、長く続いてほしいと私自身も願っています。

この機会に、「につぼん丸」のクルーの皆様にも感謝を申し上げたいと思います。今回の航海は、全期間を通じて、比較的揺れも少なく、相対的に快適な船旅だったと認識しています。これは、運航クルーの皆様の、我々が気付かない的確な御判断や御配慮も寄与していたことと思います。また、アメニティを担当してくださったクルーの皆様にもとても良くしていただきました。謹んで感謝申し上げます。

参加青年について申し上げますと、とにかく、参加青年の今を精一杯楽しもうとするパワーに圧倒されました。

そして、そのパワーを源として、様々な場面で、企画力、発信力、リーダーシップ、コミュニケーション能力などが発揮されるのを見て感動しました。もちろん、最初からある程度、そのような能力を持っていた人も多いと思いますが、この事業に参加することで、どんどん磨きがかかっていったことと思います。

活動には、船上・訪問国、共に様々なものがありましたが、参加青年の切り替えはすばらしく、真面目な式典の場では、卒倒しそうなほど暑い中でも礼儀正しく座っていましたし、ディスカッションの場では真剣に討議し、パフォーマンスの場では見事なパフォーマーとなり、レクリエーションの場では全身で楽しんでいました。また、衣装が替わるたびに参加青年の違った表情が見られ、その点にも感銘を受けました。

参加青年は、日本での活動と40日以上航海という約50日のプログラムを通じて、たくさんの人たちと、国籍、性別、年齢差を超えて仲良くなり、理解し合ったことと思います。きっと参加青年は、これからそのネットワークを生かしつつ、各地で事後活動に励んでくれることと思います。平和の礎は相互理解と友好です。ぜひ参加青年には平和の架け橋になってほしいと思います。

私自身について言えば、私はあまり英語能力が高くなく、そのため不安もありましたが、たくさんの方のサポートのおかげで、どうにか最後まで務めることができました。ナショナル・リーダーもファシリテーターも各国事後活動組織代表者も、また管理部員も皆、仲が良く、私を助けてくれ、プログラムの実施について真摯に協力してくれました。

各国での要人表敬、式典における要人との談笑・食事・ギフト交換、大勢の人たちの前でのスピーチなど、本当に得難い経験をしました。また、いろいろな民族衣装を着たり、期間中に迎えた私の誕生日には300人を超える参加青年全員がバースデーソングを歌ってくれたりしたことも楽しい思い出となっています。

唯一残念だったのは、ミャンマー参加青年が2人、健康上の理由からヤンゴンで下船せざるを得なかったことです。しかし、彼らを含め、私たちは既にSSEAYP FAMILYの一員です。既参加青年だけがSSEAYP FAMILYではありません。既参加青年ではないナショナル・リーダーもファシリテーターもホストファミリーもローカルユースも、そして私たち管理部員も皆、SSEAYP FAMILYの一員です。

このプログラムの期間中、たくさんの既参加青年の方から“SSEAYP changed my life.”という言葉をお聞きしました。きっと、第42回の参加青年の多くの人生もこれから変わるか、あるいは既に変わっていることでしょう。何百人もの人たちの人生を変えるようなプログラムに関われたことは私にとってとても幸せなことでした。そして、この第42回の管理官を務められたこと、そして、第

42回の参加青年は私の誇りです。

最後に。SSEAYPは私の人生をも変えたのか。それ

はこれから分かることと思いますが、私としては、私の人生も変わっていることを強く願っています。

2 参加青年による事業評価

プログラム終了時に実施した評価シートの集計（ナショナル・リーダー11名、参加青年309名）

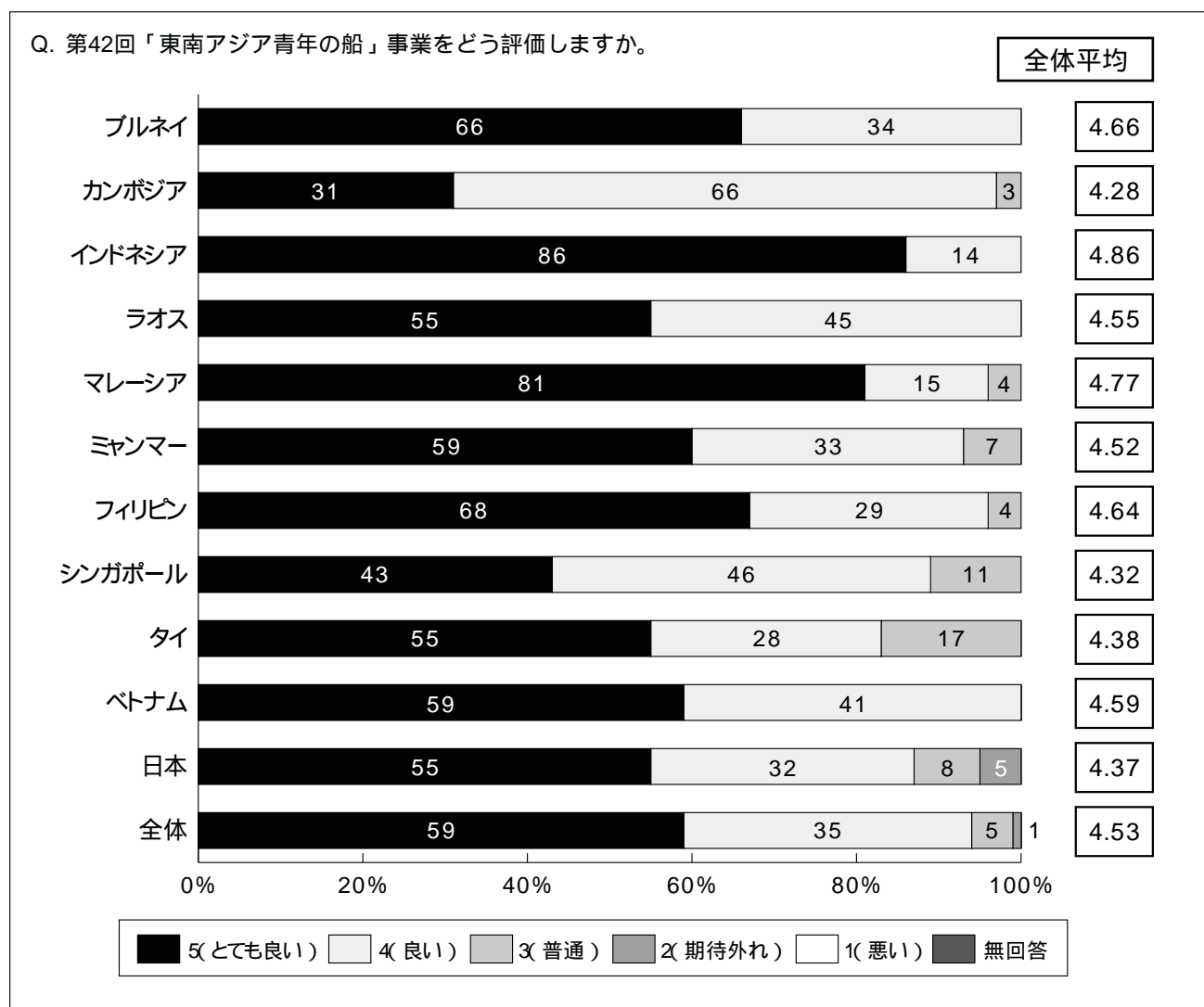
注：値は小数点第一位で四捨五入されている。

統計処理上、合計が100%にならないことがある。

[事業全体]

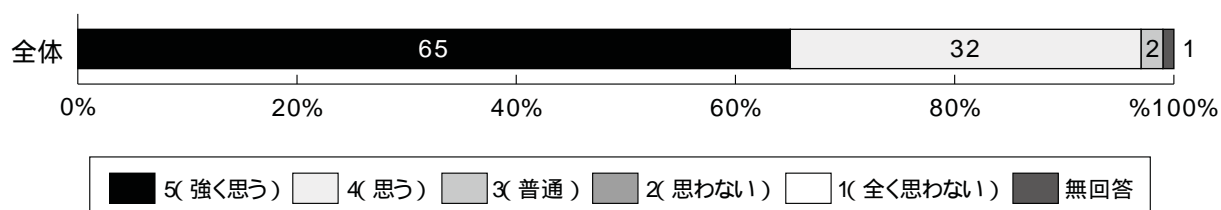
事業全体に関しては、全体平均は4.53で、94%の参加者が4以上（良い、とても良い）と評価した。

この事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、それぞれ97%、98%が4以上（思う、強く思う）と評価した。また、この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えるかとの問いに対し、「異文化への対応力」、「集団生活への適応力（協調性と柔軟性）」、「自国民としてのアイデンティティと誇り」、「責任感」及び「国内外の友人・ネットワーク作り」に関して、85%が4以上（大きな効果がある、著しく大きな効果がある）の評価をした。



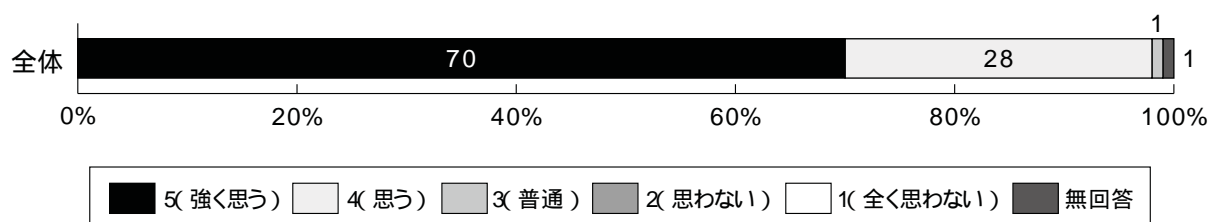
Q. この事業が、あなたと各国の人々との相互理解を促進することに
貢献していると思いますか。

全体平均: 4.63



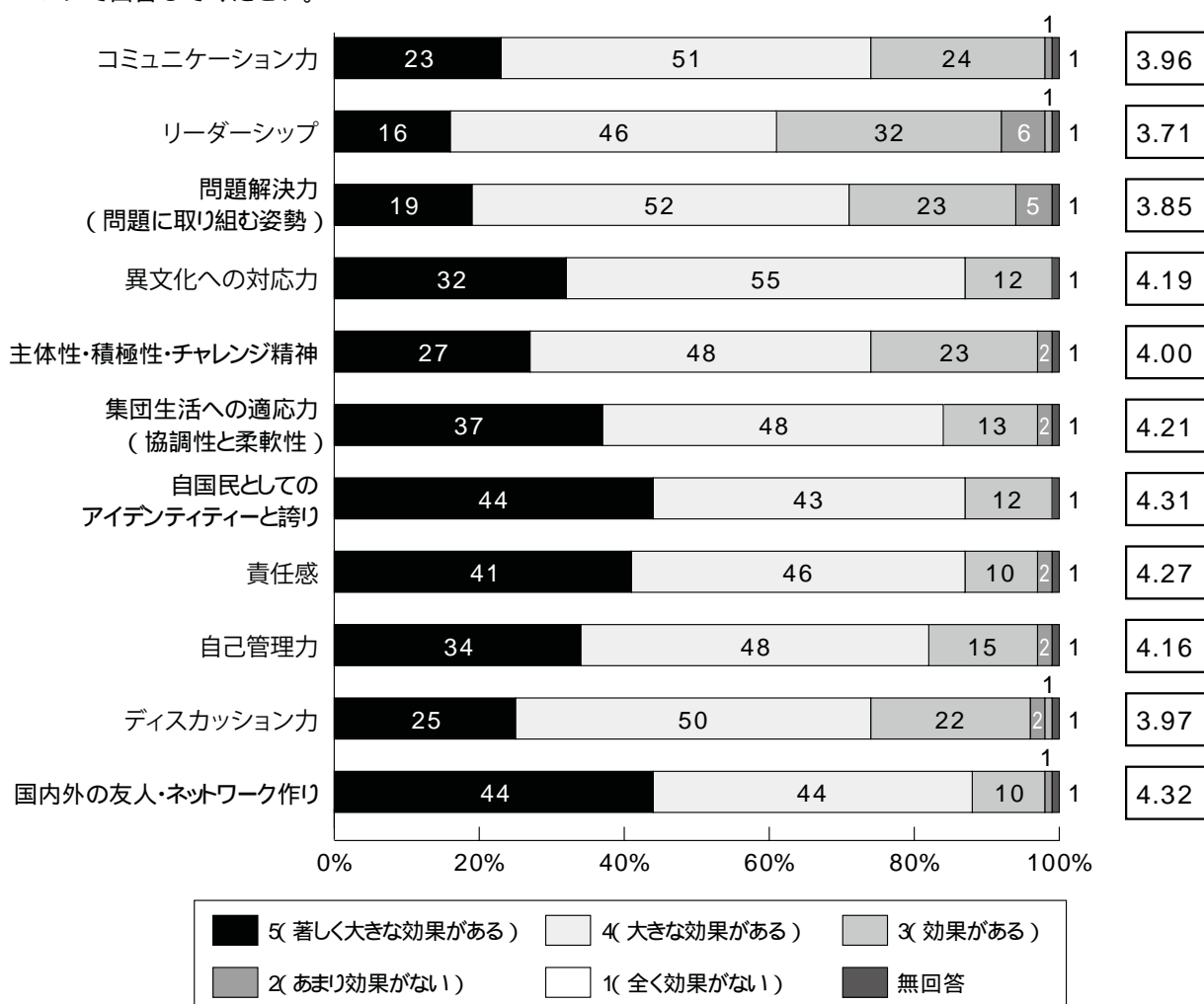
Q. この事業が、あなたと各国の人々との友情を築くことに
貢献していると思いますか。

全体平均: 4.69



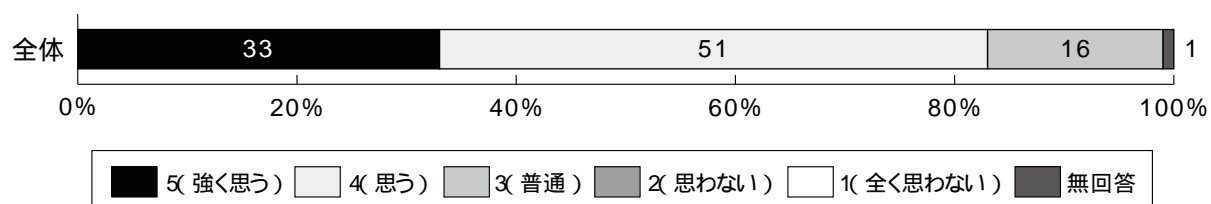
Q. この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えますか。それぞれの項目に
ついて回答してください。

全体平均: 4.13



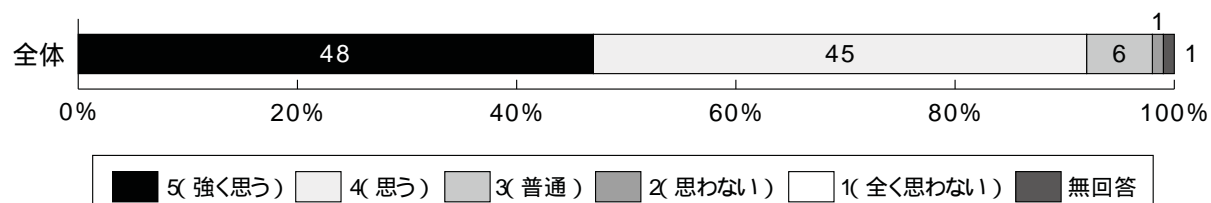
Q. この事業への参加は、あなたのキャリア(職業)における将来性を高めるといいますか。

全体平均: 4.17



Q. この事業への参加は、社会貢献活動へ参加したいという意欲を高めるといいますか。

全体平均: 4.41

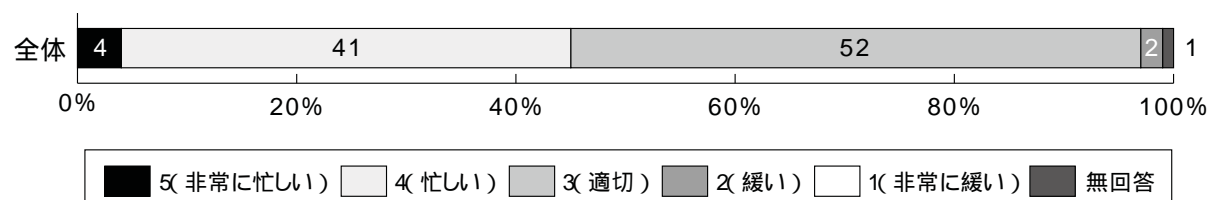


[船内活動]

Q. 船内活動の日程についてどう思いますか。

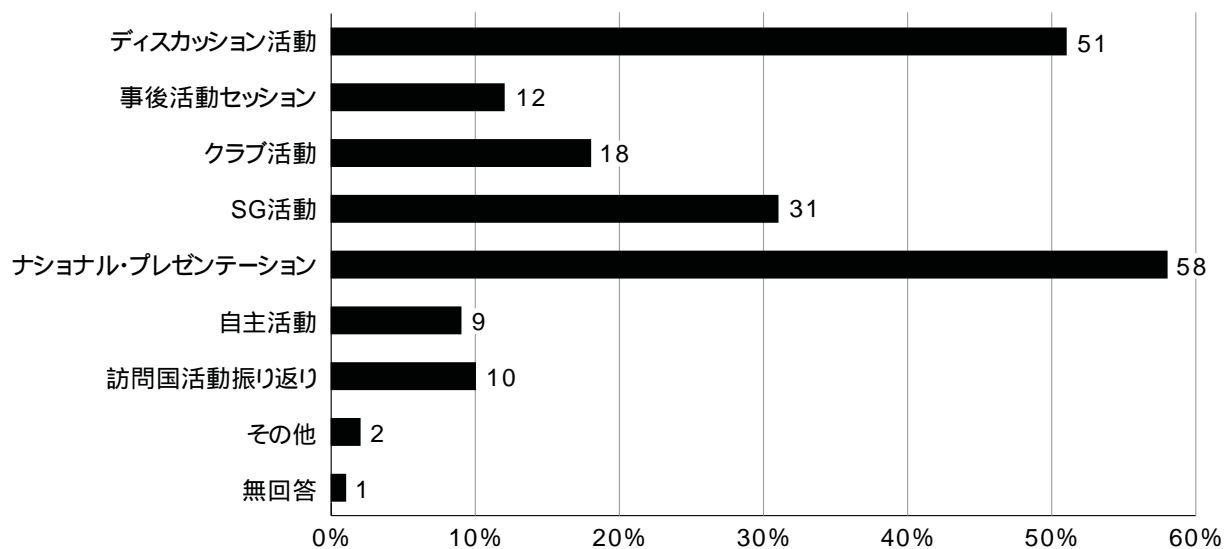
船内活動の日程について、52%の参加者が3(適切)と評価し、45%が4以上(忙しい、非常に忙しい)とした。前年度(3が42%、4以上が57%、平均3.65)と比べると、適切とする評価が増加した。

全体平均: 3.47

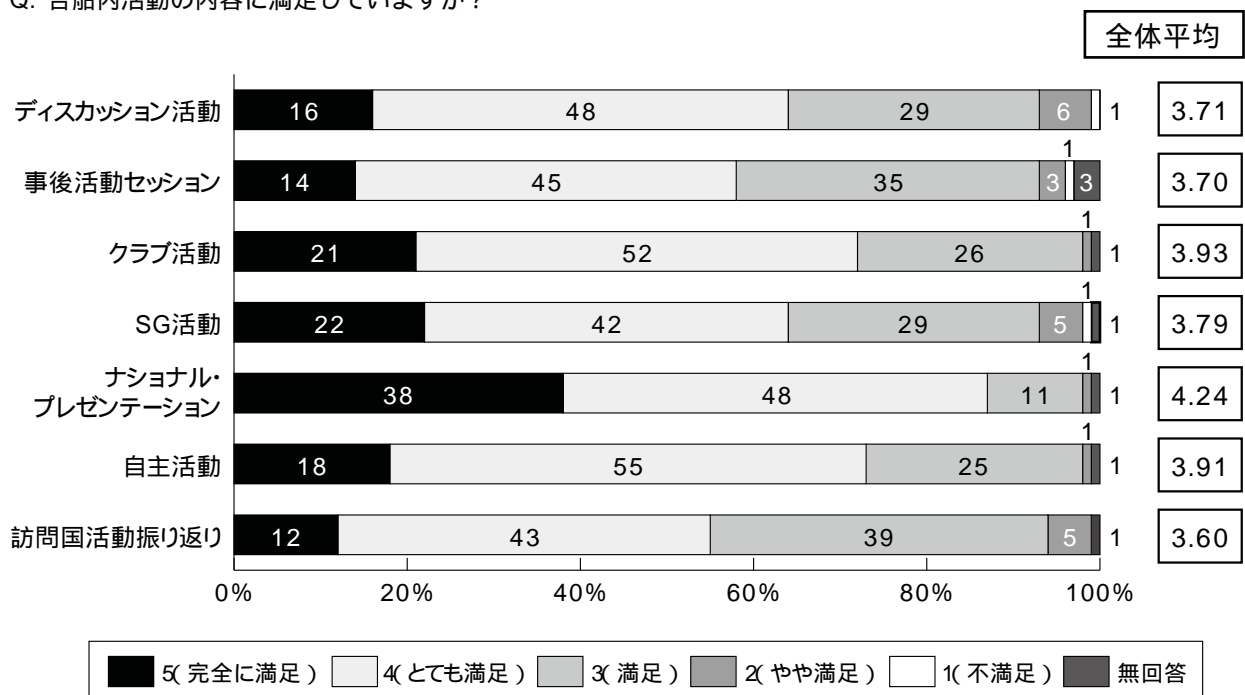


船内活動について、「最も意義のある船内活動」として参加者が選択（1つ又は2つまで選択可）したのは、多い順に、ナショナル・プレゼンテーション、ディスカッション活動、SG活動、となった。一方、それぞれの船内活動の内容についての満足度は、前年度の評価と大きな差はなく、全体平均の高い順に、ナショナル・プレゼンテーション、クラブ活動、自主活動、となった。

Q. 最も意義のある船内活動は何ですか？（1つ又は2つまで選択可）

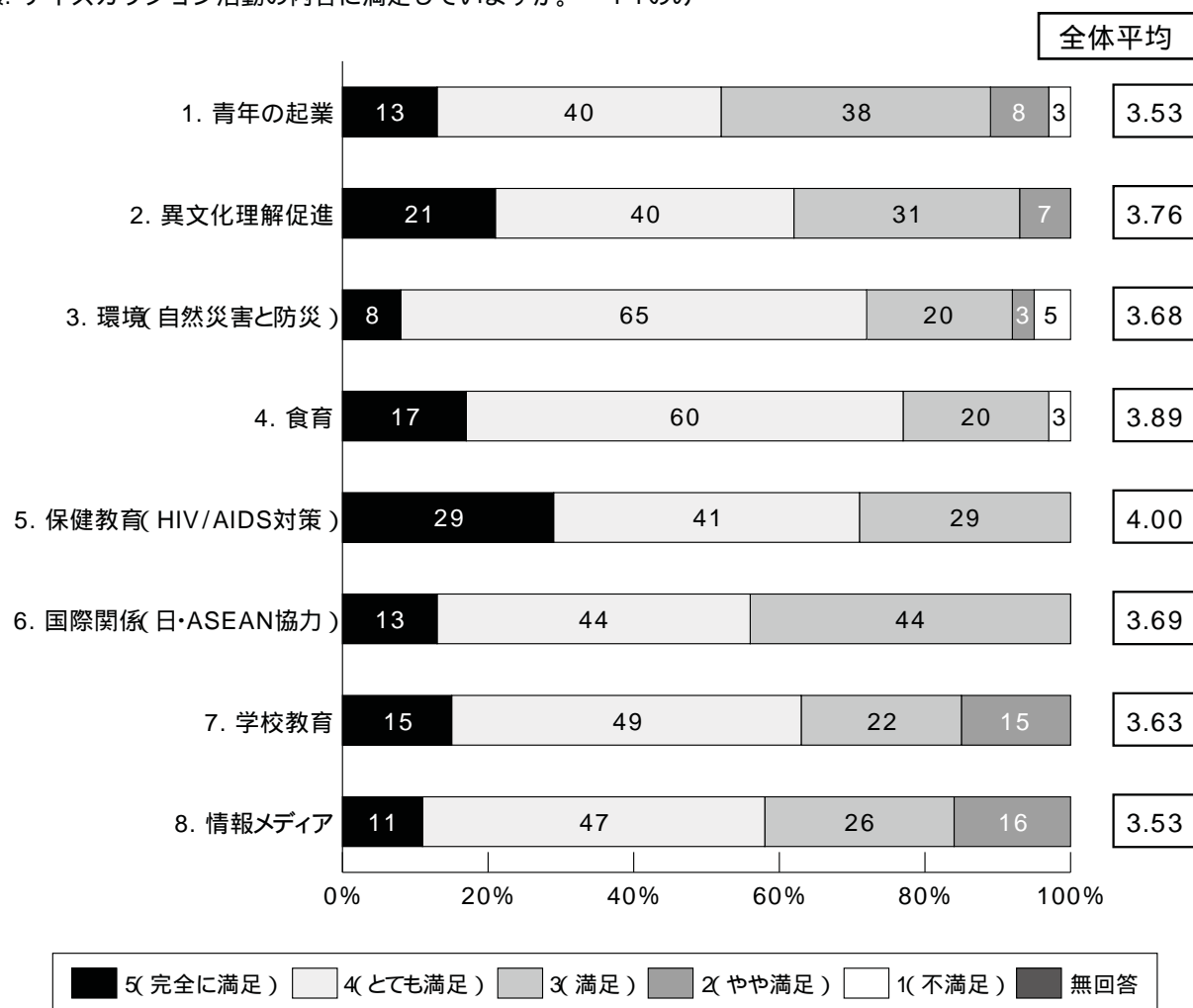


Q. 各船内活動の内容に満足していますか？

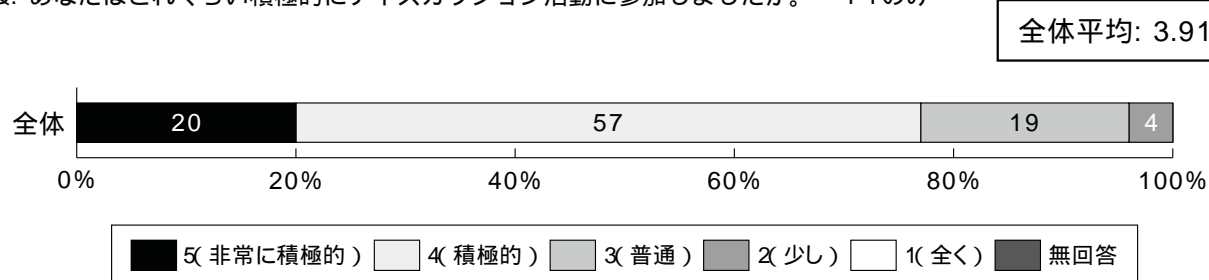


[ディスカッション活動]

Q. ディスカッション活動の内容に満足していますか。 *PYのみ



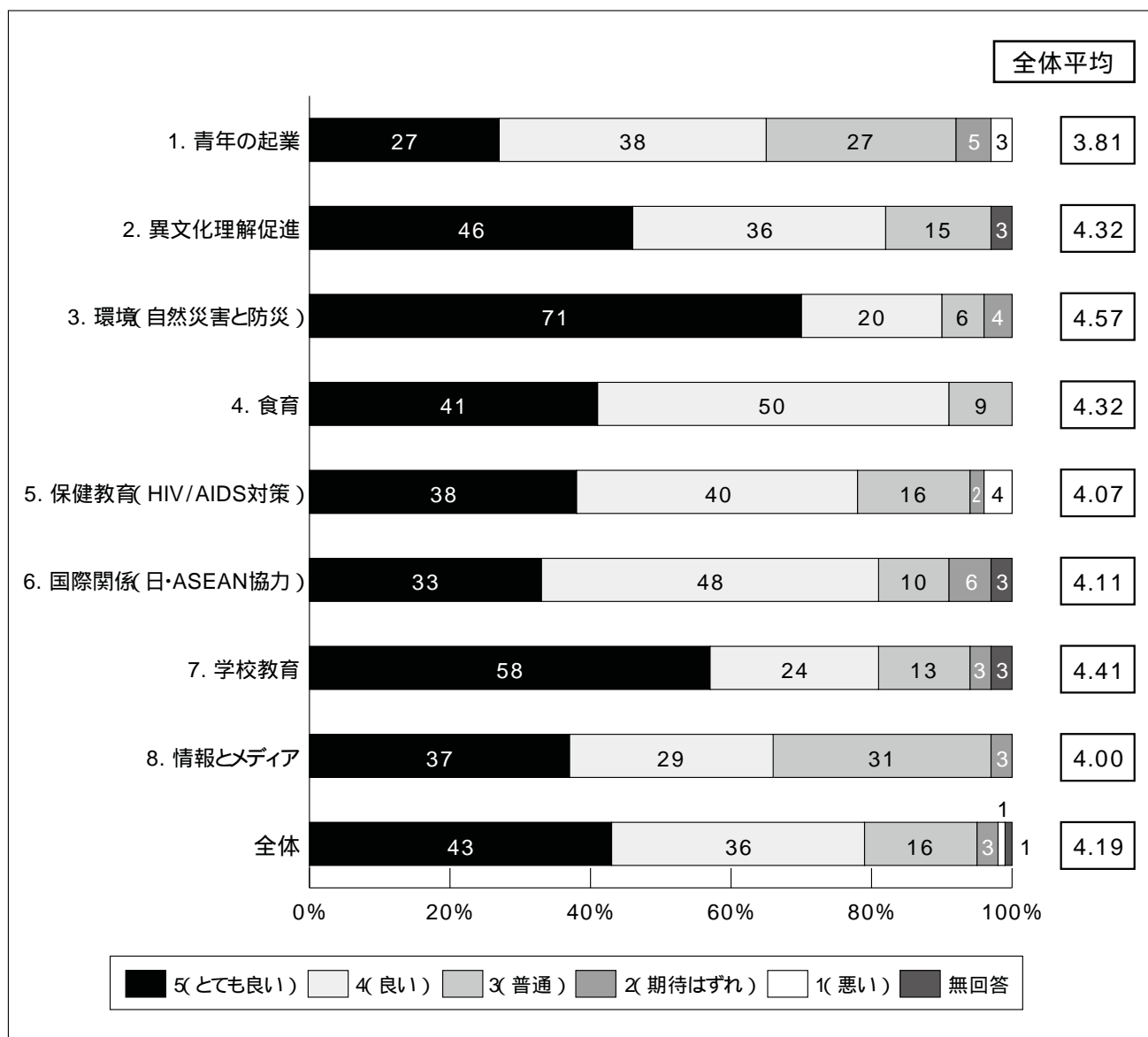
Q. あなたはどれくらい積極的にディスカッション活動に参加しましたか。 *PYのみ



[日本及びフィリピンにおける課題別視察]

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察をどう評価しますか。

ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察に参加した青年の79%が4以上（良い、とても良い）と評価した。



DG-1 青年の起業: 株式会社a. school

DG-2 異文化理解促進: 裏千家

DG-3 環境(自然災害と防災): 東京臨海広域防災公園そなエリア東京、一般社団法人防災教育普及協会

DG-4 食育: 株式会社タニタ総合研究所

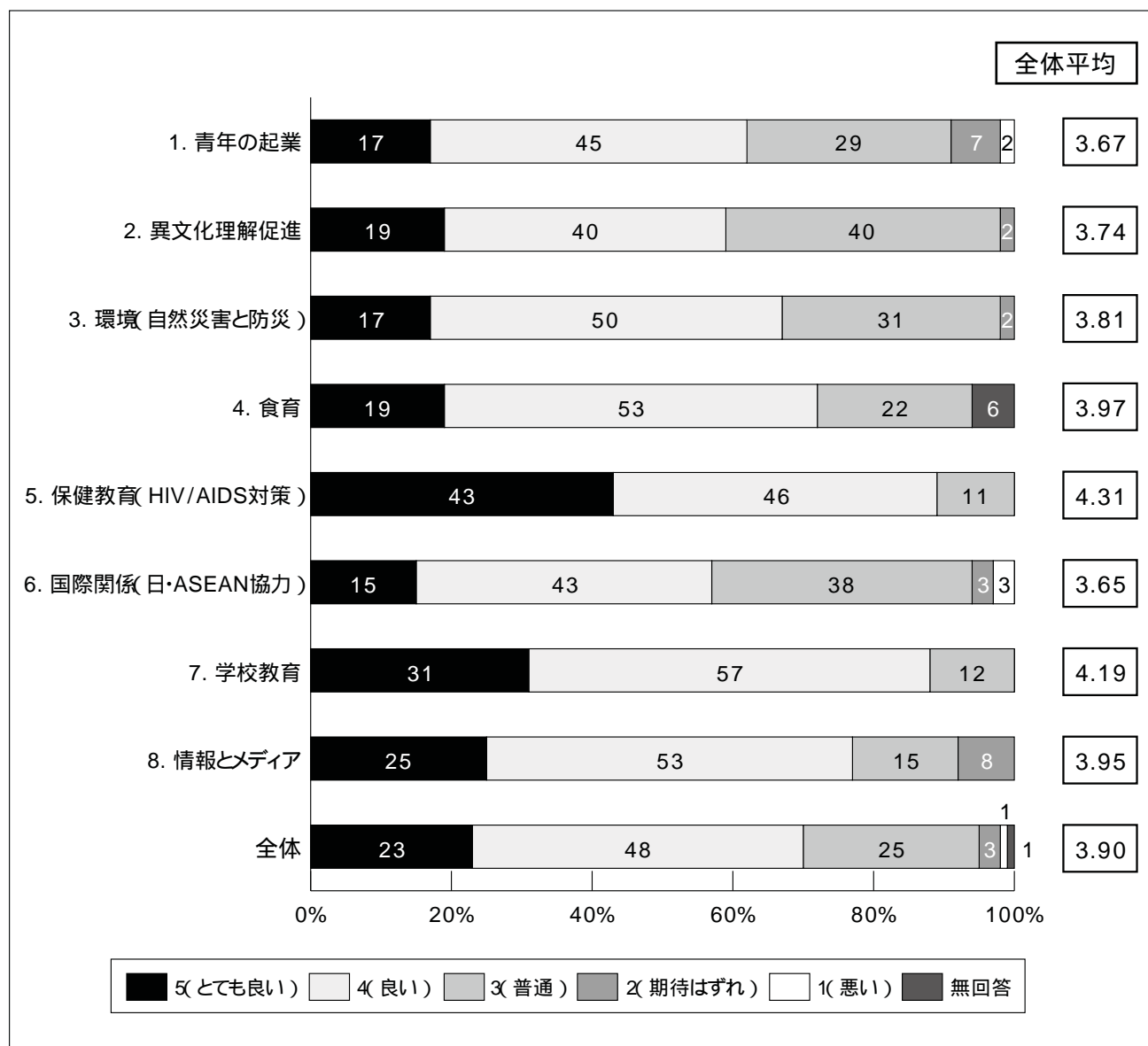
DG-5 保健教育(HIV/AIDS対策): 特定非営利活動法人ぷれいす東京、特定非営利活動法人akta

DG-6 国際関係(日・ASEAN協力): 国際機関日本アセアンセンター、特定非営利活動法人開発教育協会

DG-7 学校教育: 品川女子学院

DG-8 情報とメディア: YouTube Space Tokyo

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、フィリピンにおける課題別視察をどう評価しますか。
 ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、フィリピンにおける課題別視察に参加した青年の71%が4以上（良い、とても良い）と評価した。



DG-1 青年の起業: パヤタス地区GK(ガワッド・カリング)13

DG-2 異文化理解促進: 国家文化芸術委員会

DG-3 環境(自然災害と防災): マニラ首都圏開発局

DG-4 食育: フィリピン女子大学

DG-5 保健教育(HIV/AIDS対策): サン・ラザロ病院、ピノイ・プラス財団

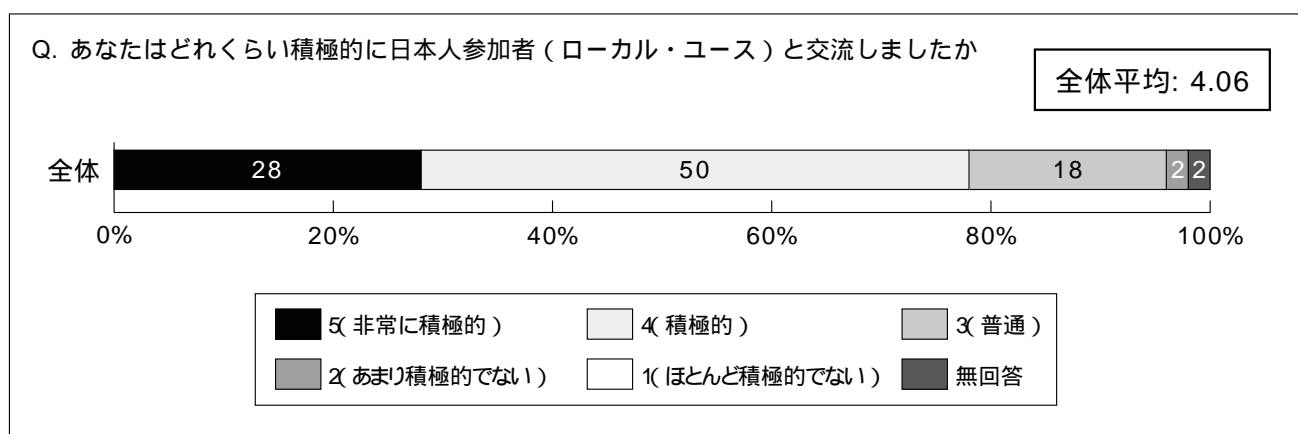
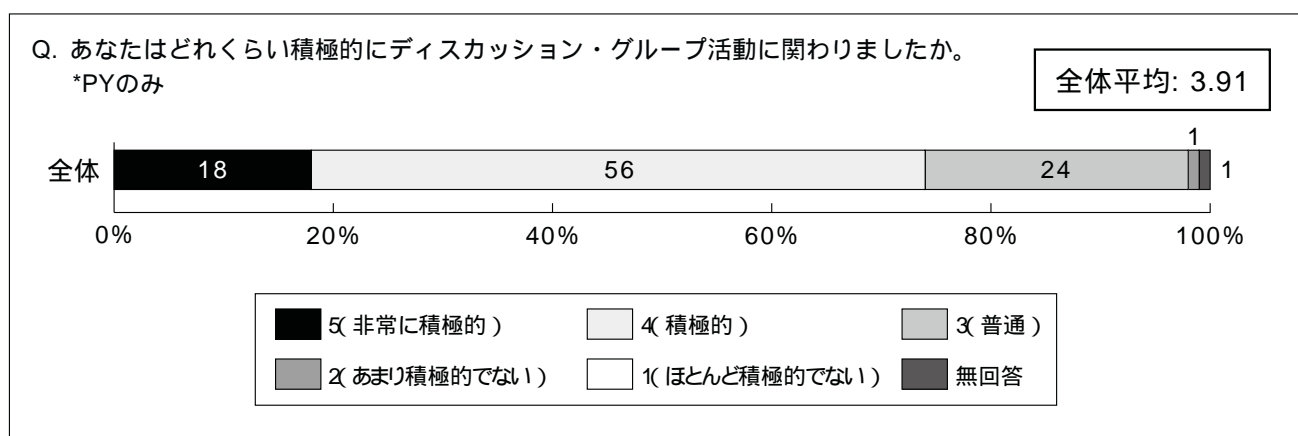
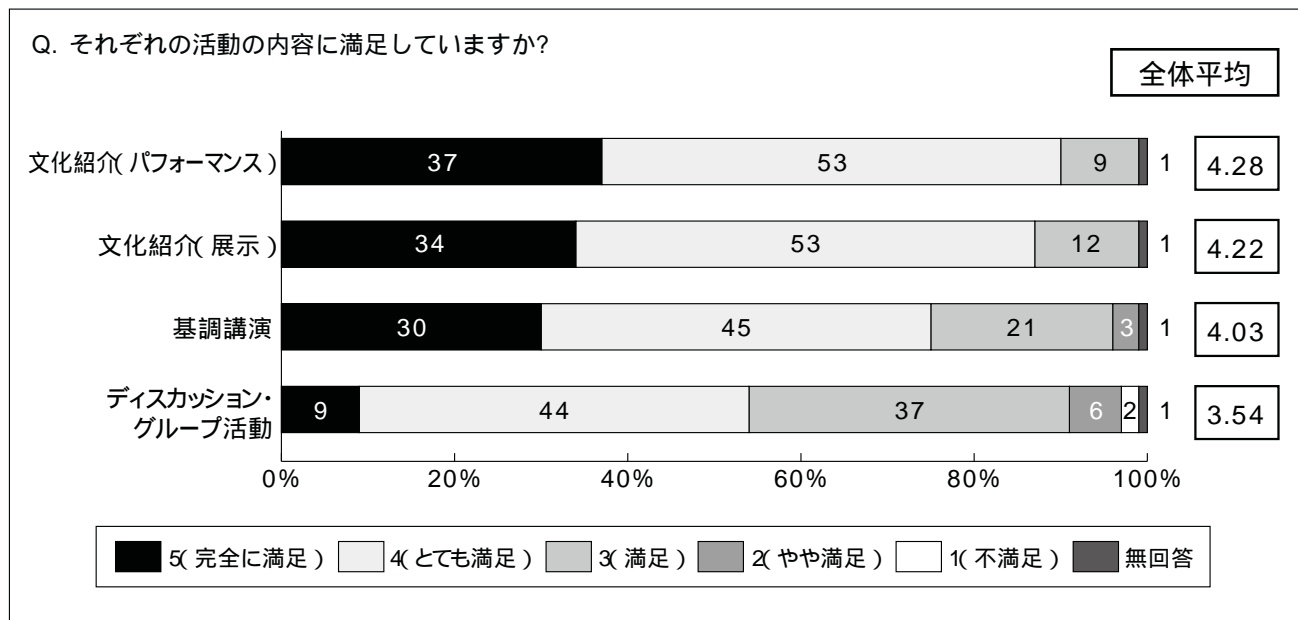
DG-6 国際関係(日・ASEAN協力): JICA技術教育モデル校支援プロジェクト(RESPSCI)

DG-7 学校教育: ドン・ボスコ青少年センター

DG-8 情報とメディア: TV5

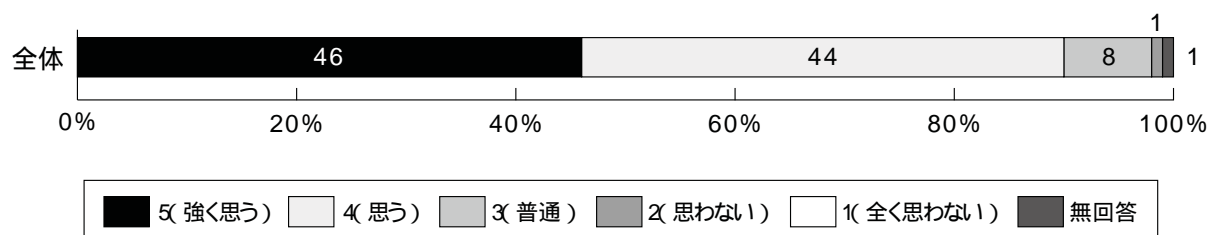
[日本・ASEANユースリーダーズサミット]

各国の「パフォーマンス」と「展示」について、それぞれ90%、87%が4以上（とても満足、完全に満足）と評価した。また、「ディスカッション・グループ活動」や「日本人参加者（ローカルユース）との交流」について、それぞれ74%、78%が4以上（積極的、非常に積極的）で、積極的に関わったと評価した。さらに、「日本・ASEANユースリーダーズサミットは、ASEAN各国と日本の相互理解の促進に貢献していると思うか」との問いに対し、90%が4以上（思う、強く思う）と評価した。



Q. 日本・ASEANユースリーダーズサミットは、ASEANと日本の相互理解を促進することには貢献していると思いますか。

全体平均: 4.36



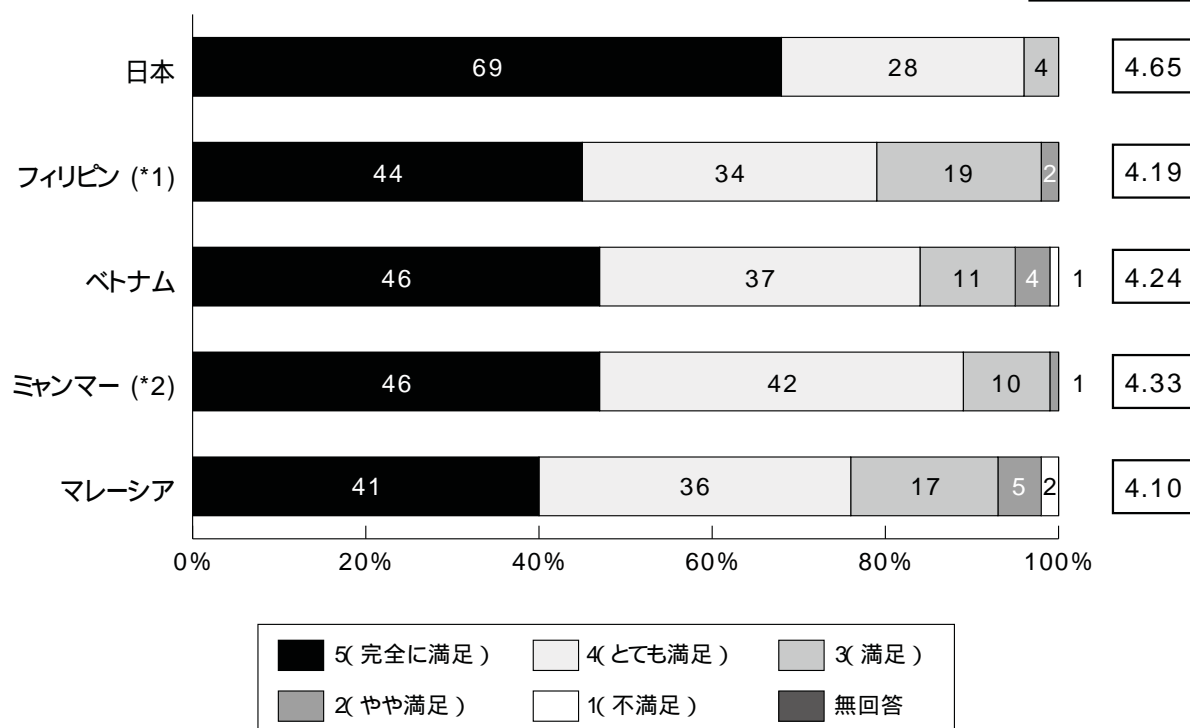
[ホームステイ]

Q. ホームステイはどうでしたか。

全ての訪問国において、77～97%が4以上（とても満足、完全に満足）と評価した。

*PYのみ (*1) フィリピンPYを除く (*2) ミャンマーPYを除く

全体平均



3 船長あいさつ

にっぽん丸船長
久保 滋弘



現在の「にっぽん丸」は、弊社商船三井客船株式会社が所有する外航旅客船としては3代目のであり、1990年に就航してから早25年を数えます。

船の年齢を「船齢」と呼び、船齢25歳といえ一般的に「相当なベテラン」と言えます。この当代「にっぽん丸」の歴史をはるかに超え、平成27年度をもって42回目を数える今回の「東南アジア青年の船」事業に、初代、そして先代の「にっぽん丸」に引き続き（途中当代「にっぽん丸の」お姉さんにあたる「ふじ丸」もお世話になりましたが・・・）、「にっぽん丸」をご用命いただきましたことに、まずもって心より感謝申し上げます。

私が弊社商船三井客船株式会社に入社したのは、現在の「にっぽん丸」が就航した1990年であり、以来、当代「にっぽん丸」と共に歩んでくる中で、これまでは主に航海士として何度もこの「東南アジア青年の船」事業に関らせていただいてまいりました。そして、このたび初めて船長としてこの航海をお預かりさせていただき、11月5日に東京を出港し、マニラ、ホーチミン市、ヤンゴン、（シンガポール）、コタキナバルを巡り12月15日に東京に帰る41日間にわたる航海を皆様と共にし、無事終えることができましたことを安堵するとともに、今回も当事業が成功裏に成就しましたことを心よりお祝い申し上げます。

これもひとえに、上村管理官をはじめとする管理部の皆様をはじめ、内閣府、日本青年国際交流機構、一般財団法人青少年国際交流推進センター、各国受入れ委員会や同窓会組織、ホストファミリー、ナショナル・リーダー、ファシリテーターの皆様方等多くの関係者によるご尽力のたまものであり、この歴史ある素晴らしい事業を「にっぽん丸」の乗組員が微力ながらお手伝いできま

したことを誇りに思います。

船長としてこの航海をお預かりするに当たり、最も気になっていたのが天候についてでありました。しかしながら、過去の「東南アジア青年の船」事業と比較しても、このたびは全般的にみて天候に恵まれ、まずまず穏やかな航海となりましたことは幸運であったと感謝しております。

また、残念ながらヤンゴン港で2名の参加青年が下船することとなってしまいましたが、その他の参加青年の皆様が概ね健康で元気に旅を終えられたことは管理部の皆様のご努力のたまものであり、青年たちとの絶妙な距離感を保ちながら彼らを導いておられる姿に感動を覚えると同時に、そのご心労は如何ばかりであったかとお察しいたします。

過去に何度も当事業に関わった中で私個人として今回特に感じましたのは、過去には一部の参加青年にどこか遠慮がちで物怖じしているような印象を抱いたこともありましたが、それも年々薄れ、今回はそのような青年をほとんど見かけなかったことです。これも各国の発展の勢いと、ITの発達による若者たちの間における情報共有の容易さの進歩によるものと思われます。

そのような時代の流れの中にあっても、当事業においては今回も変わらず、多様な文化、歴史、宗教的背景を持つ参加青年たちが大自然との出会いや非日常的な体験を共有しながら、「にっぽん丸」という一つ屋根の下で共に過ごし、また、発展著しいASEAN各国を訪れる中で容易に打ち解けあい、文化、歴史、宗教等における互いの多様性を受け入れ、理解しようと努力する姿を目の当たりにし、頼もしく感じると同時にASEAN各国と日本の関係性における当事業の重要性をあらためて感じました。

ASEAN各国及び日本の交流にとって重要な当事業の未永い継続とご発展並びに参加青年の皆様のご活躍と交流の継続をお祈りするとともに、にっぽん丸が、また、私個人としても今後とも当事業のお手伝いができますことを心より願っております。